

過剰適応と被受容感の観点からみた 大学生の友人関係パターンの検討

Examining the Type of University Students' Friendship from the Perspective of Over-Adaptation and Sense of Acceptance

依 田 桃 佳

Momoka YODA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程前期 2022 年度修了)

要 約

本研究では、青年期の中でも凝集性の高い集団に所属していない大学生を対象に、友人関係と過剰適応、被受容感の関連を検討した。親友を「友人の中でも特に心を許しあえる関係の人」、友だちを「日常生活の中で話をする関係の人」と定義し、その間で適応方略に差がみられるのではないかと考え、過剰適応、被受容感という2つの概念を用いて友人関係のパターンを検討した。大学生400名を対象に調査を行い、親友・友だちのそれぞれに対する過剰適応状態の類型化を行うために階層的クラスタ分析を行った結果、6つの群が見出された。また、被受容感の感じ方に群間で差がみられた。さらに、親友と友だちに対する被受容感の感じ方の差については、群による違いは見出されなかった。以上より、大学生の友人関係には様々なパターンが存在し、適応方略や関係性への満足度の違いがある可能性が示唆された。

[Abstract]

It is known that groups among university students are less cohesive than among adolescents. This study examined whether over-adaptation and sense of acceptance are influenced by the type of university students' friendship. Regarding the type of friendship, we defined a best friend as "a person with whom one feels comfortable," and a friend as "a person with whom one talks in daily life." A survey was conducted to investigate differences in the sense of acceptance among the type of friendship and over-adaptation. A total of 400 university students participated in the survey. The results are as follows: First, the hierarchical cluster analysis of over-adaptation revealed 6 clusters. Second, there was a difference in sense of acceptance among the clusters. Third, no difference was shown in sense of acceptance by type of friendship. The study suggests that there may be differences in their adaptation strategies among various types of university students' friendship.

第1章 問題

1-1 青年期の友人関係

青年期は、子どもから大人への移行期にあたる。Erikson(1959)の漸成的発達理論によると、青年期は親への依存から脱して自立した成人になる時期であり、この時期の発達課題はアイデンティティの確立である。そして、高橋・高橋(2022)によると、青年期は親や友人との関係が良好であること、または安心感を得て互いに学び合うような人間関係を持つことによって、心理的自立が高まることが示されている。このことから、アイデンティティの確立のために必要な要素の一つに友人関係の構築があることが考えられる。

青年期の友人関係の特徴として、岡田(2007)は「内面的友人関係」と「現代的友人関係」の2つを提唱した。前者は「親密で内面を開示するような関係、人格的共鳴や同一視をもたらすような関係」と定義されている。後者は「内面的友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないように、表面的に円滑な関係を志向する傾向」と定義されている。前者の友人関係を取る青年は比較的適応的な傾向を示すが、後者の友人関係を取る青年は不適応的な傾向を示すことが示唆されている。これらの友人関係は青年の友人関係の築き方を指す言葉である。しかし、同じ「友人」といっても、一個人の中には、それぞれの友人との関係性、関わり方に違いがあることが考えられる。つまり、一個人の中に複数の友人関係が存在している可能性が考えられる。本研究では、過剰適応という概念を用いて友人関係パターンを探ることとする。

1-2 過剰適応

「過剰適応」とは、「自己の不全感や自分らしさがいないために、必要以上に自己抑制的な振る舞いをしたり他者からの期待や要求に応えようとしたりする努力が行き過ぎている状態」(風間, 2015)と定義されている。過剰適応の概念構造として、石津・安保(2007)は外的側面と内的側面の2側面を提唱している。外的側面は、社会的・文化的適応、つまり現実的な環境に対する適応を指し、他者の期待に沿う行動やよく思われたい欲求の高さ、他者配慮などの他者志向的な側面がこれにあたる。一方で内的側面は、心理的適応、つまり幸福感や満足感のある状態で心理的に安定しているかどうかを指し、自己抑制的で自己不全的な側面がこれにあたる。また、桑山(2003)において、過剰適応的な態度は「外的適応が過剰なために内的適応が困難に陥っている状態」と定義されている。つまり、過剰適応的な態度とは自分の感情を抑えてでも他者や周りに適応しようと過剰に振舞うことである。過剰適応には、学校不適応に繋がる(石津・安保, 2007)、承認欲求や見捨てられ不安が高まる(益子, 2008)、セルフコンパッションの低さに繋がる(竹村・岡田・柴, 2021)といったように、不健康につながる特徴が存在する。しかし一方で、他者志向的動機(春日・宇都宮・サトウ, 2014)に繋がるといった、自らの意思で他者に尽くし、満足感を得る、というような自己決定的な動機に繋がる健康的な特徴も存在する。つまり過剰適応的な態度をとる者は一概に適応に難を示しているのではなく、過剰適応的なふるまいを選択することがその人自身の適応方略になっていることが考えられる。よって、過剰適応には適応面・不適応面の両方が存在していると考えられる。本研究では過剰適応の2側面を扱っている風間・平石(2018)に基づき、他者志向性と自己抑制の2つの側面で過剰適応を測ることとする。

研究では対象を「友人」に絞り、過剰適応について検討する。風間・平石(2018)では、両親、教師、友人に分けて過剰適応について検討した結果、個人内で対象別に過剰適応の傾向に差がみられる群があることが明らかになっている。しかし、一個人の中で同じ「友人」と分類されていても、親密性や心理的距離などの違いによって関係性は異なることが考えられる。例えば、竹端・後和(2020)は、大学生は他者への依存を弱めることで過剰な他者意識からも逃れていること、そして、他者との積極的な関わりが却って過剰な他者意識を生じさせる要因になり得ることを示唆している。このことから、より親しい友人に対してのみ過剰適応的な関わりをすることが予想される。そこで本研究では、友人関係の違いによって過剰適応の傾向に違いがみられるかを検討する。

1-3 被受容感

過剰適応的な態度をとる者の内的適応指標の1つに自尊感情が挙げられる(益子, 2010)。過剰適応的な態度をとる者は、他者に認められようと努力することで自己価値の随伴性を高め、自尊感情の低下を防いでいる。この自尊感情を形成する要因の1つに「被受容感」が挙げられる(関・堀井, 2019)。被受容感は「自分は他者に大切にされている」という認識と情緒(杉山・坂本, 2006)と定義されている。杉本・庄司(2006)では、「居場所」の心理的機能の1つとされている。被受容感は、相手から自分のありのままを受け入れてもらえているという感覚であり、この感覚は友人関係に敏感な青年期において重要な概念である。小林・大久保(2020)は、被受容感が高まることによってポジティブな自己スキーマ、他者スキーマが強まることを示している。つまり、被受容感が高まると、自己や他者に対してポジティブな見方ができるようになると考えられる。それによって、さらに被受容感を獲得することができ、自信がついたり、安定したアイデンティティ形成を行えたり、対人関係への困難が減少すると考えられる。また、近江・田名場・田名場(2004)は、大学生が被受容感を感じる対象として、大学1年生は母親と回答する人が最も多く、次いで親友、友だちであったが、2年生以上は親友と回答する人が最も多く、次いで母親、恋人であったとしている。つまり、学年が上がるにつれて、最も被受容感を感じる対象が母親から親友へと移り変わっており、友だちはその順位が下がっていると考えられる。このことから、同じ友人であっても親友と友だちで被受容感の感じ方に差が見られ、それは学年が上がるごとに大きくなるのが推察される。よって、本研究では被受容感について、対象を分けて考えることが必要だと考える。

1-4 友人関係の違い

友人関係と過剰適応の概念の研究において、「友人」は一つのカテゴリとして捉えられてきた。しかしながら、友人関係の中でも親密性や心理的距離の異なる友人は存在しており、その中で適応感に差が生じているかについての研究は今までなされていない。たとえば、石本・久川・斎藤・上長・則定・日瀧・森口(2009)は、青年期女子の友人関係のうち、表面的な友人関係をとる者は心理的距離が遠く、同調性が高いという特徴があり、心理的適応・学校適応ともに不適応的だということを明らかにした。よって、岡田(2007)で述べられている「現代的友人関係」と同様に、表面的な友人関係では不適応的になるという結果が得られている。しかし、表面的な友人関係を取る人は、友人全員に対して同様の関わりをするのだろうか。友人について、その対象によって関係づくりの仕方や適応方略を変える、と明確に考えられている研究は存在していない。友人によって適応方略を変える者がいた場合、心理的な距離が近い対象と遠い対象では、その者が自覚している関係性が異なっていると考えられる。例えば、同じ方略をとる者ほど、友人に対する心理的距離が対象に関わらず同じような距離感だが、異なる方略をとる者ほど、友人それぞれへの心理的距離も異なり、対象による差が大きくなるのではないかと考えられる。そして、心理的距離が対象によって異なる者ほど、被受容感も対象によって感じる度合いが異なるのではないかと推察される。よって本研究では友人関係による被受容感の感じ方の差のみならず、適応方略によって被受容感の感じ方に差がみられるのかを検討することとする。

友人関係を分ける基準として、青年期後期の大学生・短大生・専門学生を対象に友人関係を位置付けた難波(2005)は、親密さと目的・行動の共有の顕著さという2つの概念から友人関係の特

徴を整理した。その結果、「親友」という言葉は親密さが高く目的・行動の共有の顕著さは低い関係性、「仲間」という言葉は親密さが親友に次いで高く目的・行動の共有の顕著さは高い関係性、「友だち」という言葉はどの程度でも使われていることが示された。本研究では、このうちの「親友」と「友だち」を用いることとした。難波(2005)にて用いられていた「仲間」は、三省堂国語辞典(2022)において「立場が同じで、一緒に活動する人(の集まり)」と定義されている。1人を想起することも可能であるが、集団を想起しやすい言葉でもありと考えられるため、本研究では「親友」と「友だち」に分け、それぞれの定義を提示したうえで、その違いについて検討することとする。

永井(2018)では、友人関係の中での居場所として、他者とのかかわりで生じる社会的居場所と1人で過ごせる個人的居場所の2つを挙げている。前者の中にも、1対1の関わりから小規模、大規模集団の関わりまで、さまざまな側面があると考えられる。本研究では、想起のしやすさ、また個人間での均一性を保つために、1対1の関係性に焦点を当てて友人関係について検討することを試みる。

また、青年期の友人関係は、その時期によっても異なると考えられる。畑野・杉村・中間・溝上・都筑(2020)によると、青年期前期・中期における青年のアイデンティティは、青年期後期・成人初期に比べて安定している可能性が示されている。この要因として、18歳前後までほとんどが学校教育を受け、そこから初めて自分の将来を選択・決定することが考えられている。大学生は進学や就職など、進路選択に自由度が増し、またそれを自分自身で決断していく必要があることから、アイデンティティが混乱する時期だと考えられる。さらに、大学生は中学生や高校生とは異なり、凝集性の高い集団に所属していないことから、そのような環境下での外的適応のためにも内的適応の重要性が高まると考えられる。また、交友関係を築くにあたって、自由度が高いがゆえに、個人のコミュニケーション能力や対人関係スキルなどの様々な要因が必要であり、自ら行動して友人を獲得する必要がある。それゆえに交友関係の幅や広げ方などの個人差が大きいと考えられる。つまり、満足のいく交友関係を築いている人もいれば、交友関係に困難を感じ、なじめなさを感じる人もいると考えられる。また、大学生は、職場という凝集性の高い集団に所属している青年とも異なる状況におかれている。このような特異的な大学生の適応方略の幅広さやその適応的・不適応的な部分を検討することにより、大学生の友人関係における様々な問題や困難に対する支援の在り方を提案できると考えられる。よって本研究では、大学生という特有の環境下におかれている青年を対象として研究を行う。

1-5 本研究の目的・仮説

以上より本研究では、①大学生は、友人との関係性によって過剰適応の傾向が異なるのか、②その過剰適応の傾向の違いによって、被受容感の感じ方は異なるのか、という2点を検討することを目的とする。

岡田(2007)で示されたように、表面的な関係性と親密な関係性では、友人関係の在り方に違いがあることから、本研究では一個人の中で、同じ友人という分類の中でも、対象によって適応方略が異なるのではないかと考え、以下2つの仮説を立てた。

仮説1 友人に対する適応方略には、相手によって用いる適応方略を変える人や、常に同じ方略を用いる人など、いくつかの類型がみられる。

仮説2 友人関係によって適応方略を変える人は、同じ方略を用いる人と比較して、「親友」と「友だち」の間で被受容感の感じ方の差が大きい。

第2章 予備調査

2-1 目的

本調査の前に、個人内の友人関係について、「親友」と「友だち」の定義をすることを目的とした予備調査を実施した。

先述のように、個人の中にある、友人1人1人との親密性や距離感の差についての分類は今までなされていない。しかし、友人1人1人との間にはそれぞれ距離感が存在している。親友とその他の友人の間にある差については、感覚的にそれぞれが持っているが、言語化することには難しさがあると考えられる。また、その関係性は主観的なものであり、客観的指標が持ちにくいものと推測される。

友人関係の違いを測る指標の1つに、心理的距離がある。これは、「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合」(金子, 1989)と定義されている。心理的な繋がりや理解しあった関係性は友人関係によって異なり、さらに安定した友人関係には必要不可欠であると考えられる。このことから、今回は指標として心理的距離を用いることとする。

以上より、本予備調査では、親友を「友人の中でも特に心を許しあえる関係の人」、友だちを「日常生活の中で、遊んだり話したりと仲良くしている人」と定義し、異なる対象を想起できるかどうかについて検討する。また、その対象間で友人関係に違いがみられるのかについても検討する。

2-2 方法

2-2-1 調査対象者

調査は、A大学大学院で臨床心理学を専攻している大学院生14名を対象に、2022年9月30日から10月14日まで、Microsoft Formsを用いて質問紙調査を行った。調査は無記名で行い、アンケートの冒頭部分で、得られたデータは統計的に処理し、一個人を問題にしない、という旨の説明文を付し、回答をもって同意を得たこととした。

2-2-2 使用尺度

1. 心理的距離尺度

「親友」「友だち」のそれぞれについて、心理的距離を測ることを目的として、金子(1989)の心理的距離尺度10項目を用いた。まず、親友に該当する友人を1人思い浮かべてもらい、その対象に感じている心理的距離の程度について、それぞれ「全く当てはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常に当てはまる」の5段階評定で回答を求めた。次に、友だちに該当する友人を1人思い浮かべてもらい、その対象に感じている心理的距離の程度について、それぞれ「全く当てはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常に当てはまる」の5段階評定で回答を求めた。

2. 関係性について

「親友」、「友だち」でそれぞれ思い浮かべた人との関係性について、コミュニケーションの内容と一緒にする行動の2点について自由記述形式での回答を求めた。なお本項目は、提示した定義内容に差が見られなかった場合に、新たに作成する定義の参考にするために設けたものであり、今回分析対象にはしなかった。

3. 感想

最後に、「親友と友だちで区別し、異なる関係性の人を思い浮かべることができましたか？わかりやすかった点、わかりにくかった点など、率直な感想を教えてください」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。なお本項目は、今回提示した定義によって異なる対象を思い浮かべられたか、調査対象者の主観を尋ねたものであり、2. 関係性についてと同様に分析対象にはしなかった。

2-2-3 結果

以下、本研究のデータの分析には、清水(2016)のHAD17.0を用いた。

①使用した尺度の検討

心理的距離尺度のうち、対象を「親友」とした全10項目について、主因子法による因子分析を行った結果、1因子構造が妥当であると判断し、再度因子分析を行った。その際、因子負荷量が.40以下の4項目を除外し、1因子6項目を採択した(Table1)。

Table1 親友に対する心理的距離（主因子法）

*6 私は親友とうまくいっていると思う	.91
7 親友と私は心のつながりがうすいように感じる	.79
*1 私は親友のことを非常に信頼している	.57
10 私と親友はあいられないところがある	.56
9 私と親友のつながりはうわべだけのものであると思う	.55
8 親友に対して反発したくなる	.54
信頼性 $\alpha = .79$	

注) *は逆転項目であることを表している。

Table2 友だちに対する心理的距離（主因子法）

*5 私は友だちといると心が安らぐ	.85
*1 私は友だちのことを非常に信頼している	.63
3 私は友だちと本当に理解しあえていないように思う	.55
9 私と友だちのつながりはうわべだけのものであると思う	.52
7 友だちと私は心のつながりがうすいように感じる	.49
8 友だちに対して反発したくなる	.45
10 私と友だちはあいられないところがある	.42
*6 私は友だちとうまくいっていると思う	.35
信頼性 $\alpha = .72$	

注) *は逆転項目であることを表している。

次に、対象を「友だち」とした全10項目について、主因子法による因子分析を行った結果、1因子構造が妥当であると判断し、再度因子分析を行った。その際、因子負荷量が.40以下の2項目を除外し、1因子8項目を採択した(Table2)。

②記述統計量

各変数の平均と標準偏差を算出した結果、対象を「親友」とした心理的距離得点の平均値は1.67点($SD=0.47$)、対象を「友だち」とした心理的距離得点の平均値は2.32点($SD=0.54$)であった。

③親友—友人間の差の検討

親友と友人の得点の平均値の差を検討するために t 検定を行った結果、有意差が見られた($t(13)=4.74, p<.001$)。つまり、個人内で「親友」と「友だち」の間に心理的距離の差がみられたことから、異なる対象を思い浮かべた回答を得られたといえる。

④関係性について

まず、コミュニケーションの内容についてである。親友に対しては「なんでも話せる」「家族の話」「恋愛の話」「趣味の話」「対人関係の悩み」などが挙げられ、友だちに対しては「挨拶」「趣味の話」「学校の話・日常の話」「家族の話」「恋愛の話」などが挙げられた。このことから、個人内で親友に対してよりプライベートな話をし、友だちに対しては共通している場や出来事の話をする傾向のある人もいれば、親友に対しても友だちに対しても差がなく同じような話題で話す人もいるということが明らかとなった。

次に、行動についてである。親友とは「ご飯を食べに行く」「旅行に行く」「イベントへ行く」「一緒に勉強をする」「買い物に行く」といった行動が挙げられ、友だちとは「映画を見に行く」「ライブに行く」「ご飯を一緒に食べる」「個人的に会ったりしない」などの行動が挙げられた。このことから、コミュニケーションの内容と同じように、個人間で対象によって行動を変えている人もいれば、行動を変えていない人もいることが明らかとなった。

2-2-4 考察

予備調査の結果から、「親友」と「友だち」で得点に有意差がみられ、親友は友だちに比べて心理的距離が近い人物であることが明らかになった。このことから、「親友」と「友だち」で分けて調査することが可能であることが示唆された。

また、関係性についての自由記述回答から、コミュニケーションの内容、一緒にする行動について、それぞれ個人内で対象によって共通している人もいれば、異なる人もいるということが明らかとなった。このことから、個人内で対象によって友人関係パターンが異なる可能性が考えられる。

また、「遊ぶ」という表現の意味は多岐にわたることから、個人差が大きいと考え、本調査では友だちの定義から「遊んだり」という文言を削除し、コミュニケーションについてのみの記載に変更することとした。

第3章 本調査

3-1 友人関係の定義

予備調査で使用した友人関係の定義について、親友を「友人の中でも特に心を許しあえる関係の人」、友だちを「日常生活の中で話をする関係の人」と改めて定義した。

3-2 方法

3-2-1 調査対象者

調査は、アイブリッジ株式会社のセルフ型アンケートツールFreeasyを利用して、2022年10月27日から28日に行った。対象は、大学1年生89名(男性29名、女性60名)、2年生88名(男性24名、女性64名)、3年生94名(男性29名、女性65名)、4年生129名(男性38名、女性91名)の計400名で、平均年齢は20.52歳($SD=1.51$)であった。なお大学5,6年生については母集団が少なかつたため、他の学年とのバランスを考慮し除外した。また、専門学生や短期大学生についても同様に、母集団が少なかった点と、同世代であるものの、生活環境が大きく異なることから、今回は除外した。調査は無記名で行った。得られたデータは統計的に処理し、一個人を問題にしないことを記した説明文を冒頭に記載し、回答をもって同意を得たこととした。

3-2-2 調査内容

1. 「親友」に対する過剰適応尺度

過剰適応尺度を測る尺度として、風間・平石(2018)の関係特定性過剰適応尺度(以下、OAS-RS)のうち「友人に対する自己抑制」「友人に対する他者志向性」に該当する13項目を用いた。まず、「親友」に該当する対象を1人思い浮かべてもらい、その対象に対する自己抑制および他者志向的な関わりの程度について、「全くあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の5段階評定で回答を求めた。

2. 「親友」に対する被受容感尺度

被受容感を測る尺度として、杉山・坂本(2006)の被受容感・被拒絶感尺度のうち「被受容感」に該当する8項目を用いた。1. 「親友」に対する過剰適応尺度の際に思い浮かべた対象と同様の対象から受容されていると感じる程度について、同様の5段階評定で回答を求めた。

3. 「友だち」に対する過剰適応尺度

1. 「親友」に対する過剰適応尺度と同様に、風間・平石(2018)のOAS-RSのうち「友人に対する自己抑制」「友人に対する他者志向性」に該当する13項目を用いた。まず「友だち」に該当する対象を1人思い浮かべてもらい、その対象に対する自己抑制および他者志向的な関わりの程度について、5段階評定で回答を求めた。

4. 「友だち」に対する被受容感尺度

2. 「親友」に対する被受容感尺度と同様に、杉山・坂本(2006)の被受容感・被拒絶感尺度のうち「被受容感」に該当する8項目を用いた。3. 「友だち」に対する過剰適応尺度の際に思い浮かべた対

象と同様の対象から受容されていると感じる程度について、同様の5段階評定で回答を求めた。

3-3 結果

3-3-1 利用した尺度の検討

①親友に対する過剰適応尺度

OAS-RSのうち、対象を「親友」とした全13項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、2因子13項目を採択した(Table3)。第I因子は友人に対して自分の考えや気持ちを言えずに抑制する態度に関する項目に高い因子負荷量を示しているため、風間・平石(2018)を参考に「親友に対する自己抑制」と命名した。第II因子は友人に対する意識や友人を意識した行動に関する項目に高い因子負荷量を示しているため、風間・平石(2018)を参考に「親友に対する他者志向性」と命名した。

Table3 親友に対する過剰適応傾向（最尤法・プロマックス回転）

	I	II
I 親友に対する自己抑制 ($\alpha=.92$)		
2 自分の考えがあっても、それを親友に伝えられない方である。	.94	-.09
1 親友に対して、自分の言いたいことがなかなか言えない方である。	.87	-.02
3 親友に対して、言いたいことを我慢することが多い。	.86	.00
6 親友に対して、自分の気持ちを抑えてしまうほうだ。	.75	.08
*4 親友に対して、言いたいことが言える方である。	.73	-.18
5 親友と違うことを思っている、それを友だちに言えない方である。	.67	.11
7 たとえ親友に不満があったとしても、それを口にできないほうである。	.54	.30
II 親友に対する他者志向性 ($\alpha=.82$)		
8 親友がどんな気持ちか考えることが多い。	-.21	.75
9 親友の顔色や様子が気になるほうである。	.01	.73
10 多少自分が我慢してでも、親友に合わせるほうである。	.09	.71
12 親友に嫌われないように行動することが多い。	.13	.64
11 親友のためなら、多少やりたくないことでも無理をしてやるほうである。	-.05	.61
13 親友に誘われたり頼まれたりしたことを断れない方である。	.04	.47
	因子間相関	.60

注) *は逆転項目であることを表している。

②友だちに対する過剰適応尺度

OAS-RSのうち、友人に対する項目で、対象を「友だち」とした全13項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、2因子13項目を採択した(Table4)。第I因子、第II因子同様、①親友に対する過剰適応尺度と同様の項目が採択されていたため、第I因子を「友だちに対する自己抑制」、第II因子を「友だちに対する他者志向性」と命名した。

Table4 友だちに対する過剰適応傾向（最尤法・プロマックス回転）

	I	II
I 友だちに対する自己抑制 ($\alpha=.91$)		
1 友だちに対して、自分の言いたいことがなかなか言えない方である。	.95	-.12
2 自分の考えがあっても、それを友だちに伝えられない方である。	.95	-.11
3 友だちに対して、言いたいことを我慢することが多い。	.77	.07
6 友だちに対して、自分の気持ちを抑えてしまうほうだ。	.70	.16
5 友だちと違うことを思っている、それを友だちに言えない方である。	.70	.12
7 たとえ友だちに不満があったとしても、それを口にできないほうである。	.58	.26
*4 友だちに対して、言いたいことが言える方である。	.56	-.09
II 友だちに対する他者志向性 ($\alpha=.85$)		
10 多少自分が我慢しても、友だちに合わせるほうである。	.03	.75
9 友だちの顔色や様子が気になるほうである。	.03	.74
11 友だちのためなら、多少やりたくないことでも無理をしてやるほうである。	-.08	.72
12 友だちに嫌われないように行動することが多い。	.08	.69
13 友だちに誘われたり頼まれたりしたことを断れない方である。	.02	.66
8 友だちがどんな気持ちか考えることが多い。	-.07	.64
	因子間相関	.66

注) *は逆転項目であることを表している。

③親友に対する被受容感尺度

被受容感尺度のうち、対象を「親友」とした全8項目について、最尤法による因子分析を行い、1因子8項目を採択した(Table5)。

Table5 親友に対する被受容感（最尤法）

3 私は親友にたいいてい認められている。	.84
5 私は親友に人並みに大切にされている。	.83
6 私は親友に信頼されている。	.83
7 親友は私と一緒にいることを喜んでくれる。	.83
4 私は親友にたいいてい受け容れられている。	.82
8 親友は私に優しくしてくれる。	.79
2 親友はたいいてい私に快く応えてくれる。	.75
1 私は親友に理解されている。	.66
	信頼性 $\alpha=.93$

④友だちに対する被受容感尺度

被受容感尺度のうち、対象を「友だち」とした全8項目について、最尤法による因子分析を行い、1因子8項目を採択した(Table6)。

Table6 友だちに対する被受容感（最尤法）

3 私は友だちにたいいてい認められている。	.81
5 私は友だちに人並みに大切にされている。	.81
7 友だちは私と一緒にいることを喜んでくれる。	.81
4 私は友だちにたいいてい受け容れられている。	.77
6 私は友だちに信頼されている。	.74
8 友だちは私に優しくしてくれる。	.74
2 友だちはたいいてい私に快く応えてくれる。	.72
1 私は友だちに理解されている。	.55
信頼性 $\alpha = .91$	

3-3-2 記述統計量

各変数の平均と標準偏差を算出した結果を Table7 に示す。また、男女差・学年差を検討するために各変数について 2 要因分散分析を行った結果、「親友に対する他者志向性」「友だちに対する自己抑制」「友だちに対する他者志向性」「親友に対する被受容感」において有意差がみられた。Holm 法で多重比較を行った結果、いずれも男女の間に差がみられた。また、学年差については、「親友に対する他者志向性」で 2 年生と 3、4 年生の間に、また「友だちに対する他者志向性」で 2 年生と 4 年生の間に差がみられた。なお、今回は仮説の検証を中心に考察するため、男女差・学年差について、考察では扱わないこととする。

平均値 (SD)	全体	1 年生		2 年生		3 年生		4 年生		多重比較	5%水準
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子		
関係特定性過剰適応尺度 (1点~5点)											
親友に対する自己抑制	2.75 (0.93)	2.46 (1.00)	2.90 (0.85)	2.52 (0.90)	2.57 (0.75)	2.90 (0.95)	2.82 (1.03)	2.83 (0.83)	2.78 (1.03)		
親友に対する他者志向性	3.34 (0.77)	3.15 (0.63)	3.55 (0.78)	2.99 (0.94)	3.14 (0.66)	3.33 (0.78)	3.44 (0.81)	3.31 (0.74)	3.41 (0.74)	男<女	2<3, 4
友だちに対する自己抑制	3.07 (0.90)	2.67 (0.88)	3.50 (0.87)	2.65 (0.90)	2.90 (0.73)	2.91 (0.75)	3.13 (0.99)	2.98 (0.70)	3.15 (0.99)		男<女
友だちに対する他者志向性	3.46 (0.79)	3.15 (0.77)	3.73 (0.80)	3.02 (0.96)	3.34 (0.66)	3.29 (0.85)	3.57 (0.74)	3.38 (0.64)	3.58 (0.79)	男<女	2<4
被受容感尺度 (1点~5点)											
親友に対する被受容感	3.85 (0.75)	3.79 (0.82)	3.92 (0.70)	3.52 (0.87)	3.79 (0.74)	3.87 (0.65)	3.95 (0.76)	3.60 (0.70)	3.99 (0.75)		男<女
友だちに対する被受容感	3.67 (0.67)	3.70 (0.73)	3.54 (0.64)	3.62 (0.73)	3.61 (0.63)	3.74 (0.66)	3.81 (0.65)	3.57 (0.64)	3.74 (0.71)		
F値 (自由度)		親友に対する自己抑制	親友に対する他者志向性	友だちに対する自己抑制	友だちに対する他者志向性	親友に対する被受容感	友だちに対する被受容感				
性別	$F(1, 392)=0.78$ n.s.	$F(1, 392)=5.21^*$	$F(1, 392)=14.29^{**}$	$F(1, 392)=16.79^{**}$	$F(1, 392)=7.10^{**}$	$F(1, 392)=0.07$ n.s.					
学年	$F(3, 392)=1.84$ n.s.	$F(3, 392)=3.15^*$	$F(3, 392)=2.19^{\dagger}$	$F(3, 392)=2.65^*$	$F(3, 392)=1.62$ n.s.	$F(3, 392)=0.94$ n.s.					
性別×学年	$F(3, 392)=1.28$ n.s.	$F(3, 392)=0.65$ n.s.	$F(3, 392)=2.41^{\dagger}$	$F(3, 392)=0.98$ n.s.	$F(3, 392)=0.89$ n.s.	$F(3, 392)=0.97$ n.s.					

注) † : $p<.10$ * : $p<.05$ ** : $p<.01$

3-3-3 過剰適応状態の類型化

友人関係の中での過剰適応状態の類型化を行うため、OAS-RS の下位尺度の標準化得点をもとに、Ward 法による階層的クラスタ分析を行った。解釈可能性の観点から 6 クラスタへの類型化を採用した。各群の特徴を Figure1 と Table8 に示した。群間の指標得点を 1 要因分散分析によって比較した結果、いずれの得点でも等分散性が仮定されなかったため、Welch の検定による分散分析を行った。

本研究では、解釈可能性を考慮し、風間・平石 (2018) を参考に、平均 + 0.5 以上だった場合は得点がやや高く、+ 1.0 以上は得点が高いとした。また、平均 - 0.5 以下だった場合は得点がやや低く、- 1.0 以上は得点が低いとみなした。そして、ある関係における自己抑制と他者志向性が高い状態を、その関係での過剰適応状態とした。一方で、その両得点が低い場合は、その相手に対して自己抑制的、他者志向的ではない状態であると考え、非過剰適応状態とした。

OAS-RSの下位尺度得点をもとに各群の特徴を見ると、まずクラスタ1 ($n=76$)ではすべての下位尺度得点が高い群であることが示された。そこで、クラスタ1は親友に対しても友だちに対しても過剰適応状態にある群であると解釈し、「過剰適応群」と命名した。クラスタ2 ($n=102$)は親友に対してのみ自己抑制得点がやや高く、それ以外の得点は中程度の群であると解釈し、「対親友自己抑制群」と命名した。クラスタ3 ($n=75$)は親友に対してのみ自己抑制得点がやや低く、それ以外の得点はやや高い群であると解釈し、「対親友非自己抑制群」と命名した。クラスタ4 ($n=32$)は親友に対しても友だちに対しても、自己抑制得点は低く、他者志向性得点は中程度である群と解釈し、「非自己抑制群」と命名した。クラスタ5 ($n=99$)、クラスタ6 ($n=16$)はいずれも、親友に対しても友だちに対しても自己抑制得点および他者志向性得点が低い群であり、その程度から解釈し、クラスタ5を「非過剰適応低群」、クラスタ6を「非過剰適応高群」と命名した。

クラスタごとの特徴より、クラスタ1, 4, 5, 6のように友人関係に関わらずパターンが同様である群と、クラスタ2, 3のように友人関係によって自己抑制の仕方に違いがある群があることが示された。一方で、他者志向性は友人関係によつての違いがみられなかった。このことから、仮説1は部分的に支持されるにとどまった。

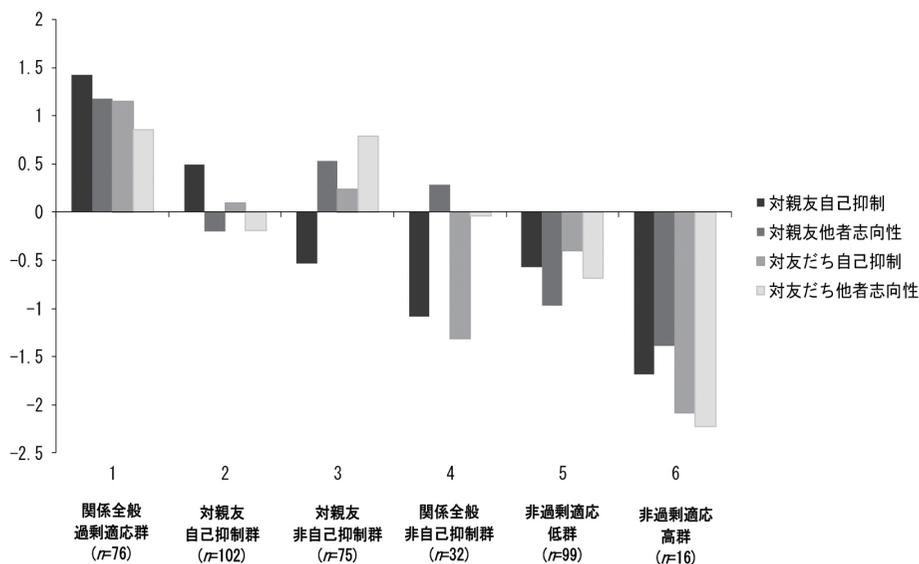


Figure1 各クラスタの特徴

3-3-4 群間差の検討

親友および友だちに対する被受容感が群間で異なるかどうかを検討するために1要因分散分析を行った結果、親友、友だち、共に、被受容感について群間での有意差が確認された。Holm法で多重比較を行った結果をTable9に示す。

続いて、親友と友だちに対する被受容感の感じ方の差が群間で異なるかを検討するために、まず、親友に対する被受容感得点と友だちに対する被受容感得点の差(以下、親友-友達)の得点差)について群ごとにt検定を行った。結果、クラスタ1, 2, 3, 4では有意な差がみられ、クラスタ5, 6ではみられなかった(Table9)。次に親友-友達の得点差を従属変数、各群を独立変数とし

Table8 各クラスタの関係特定性過剰適応尺度の下位尺度得点及び分散分析結果

平均値 (SD)	CL1		CL2		CL3		CL4		CL5		CL6		Welch検定 (df)	多重比較
	過剰適応群 (n=76)	対親友自己抑制群 (n=102)	対親友非自己抑制群 (n=75)	非自己抑制群 (n=32)	非過剰適応低群 (n=99)	非過剰適応高群 (n=16)	等分散性の検定 (df)							
親友に対する自己抑制	4.07(0.46)	3.21(0.36)	2.26(0.53)	1.74(0.39)	2.22(0.41)	1.18(0.30)	296.12** (5,394)	327.41** (5,101.95)	1>2, 3, 4, 5, 6 3>4, 6 5>4 4>6 5>6					
親友に対する他者志向性	4.24(0.48)	3.18(0.45)	3.75(0.46)	3.55(0.51)	2.59(0.40)	2.27(0.69)	142.84** (5,394)	141.52** (5,96.13)	1>2, 3, 4, 5, 6 3, 4>2 2>5, 6 3>4, 5, 6 4>5, 6 5>6					
友だちに対する自己抑制	4.11(0.47)	3.15(0.44)	3.28(0.79)	1.88(0.44)	2.71(0.60)	1.18(0.28)	128.13** (5,394)	265.49** (5,107.53)	1>2, 3, 4, 5, 6 2>4, 5, 6 3>4, 5, 6 5>4 4>6 5>6					
友だちに対する他者志向性	4.13(0.58)	3.31(0.33)	4.08(0.54)	3.43(0.50)	2.92(0.60)	1.71(0.49)	108.26** (5,394)	97.86** (5,96.84)	1>2, 4, 5, 6 3>2 2>5, 6 3>4, 5, 6 4>5, 6 5>6					

注) **: $p < .01$

Table9 被受容感の感じ方と、親友一友だちの差に関する分散分析・t検定結果

平均値 (SD)	CL1		CL2		CL3		CL4		CL5		CL6		Welch検定 (df)	多重比較
	過剰適応群 (n=76)	対親友自己抑制群 (n=102)	対親友非自己抑制群 (n=75)	非自己抑制群 (n=32)	非過剰適応低群 (n=99)	非過剰適応高群 (n=16)	等分散性の検定 (df)							
親友に対する被受容感	3.88(0.64)	3.53(0.56)	4.24(0.54)	4.27(0.66)	3.61(0.93)	4.48(0.54)	16.71** (5,394)	21.76** (5,100.18)	1>2, 6 3, 4>1 3, 4, 6>2 3>5 4>5 6>5					
友だちに対する被受容感	3.68(0.62)	3.43(0.52)	3.89(0.60)	4.03(0.68)	3.48(0.71)	4.55(0.54)	15.52** (5,394)	17.62** (5,99.11)	1>2 4, 6>1 3, 4, 6>2 3>5 6>3 4>5 6>4 6>5					
親友一友だちの差	0.19(0.48)	0.10(0.42)	0.35(0.62)	0.24(0.56)	0.13(0.79)	-0.07(0.58)	2.31* (5,394)	2.41* (5,97.80)	n. s.					
親友一友だちの群内での差の検定 (t値)	3.54**	2.45*	4.86**	2.45*	1.60 n. s.	0.48 n. s.								

注) *: $p < .05$ **: $p < .01$

て1要因分散分析を行った結果、いずれも等分散性が仮定されなかったため、Welchの検定による分散分析を行った。結果、群の主効果が見られたが、多重比較を行った結果、群間には有意差が認められなかった(Table9)。よって、群間での被受容感の感じ方の差は見られないことが示され、仮説2は支持されなかった。

3-4 考察

3-4-1 過剰適応状態の類型化

本研究では、大学生は、友人との関係性によって過剰適応の傾向が異なるのかを検討することを第1の目的とした。そこで、友人に対する適応方略には、相手によって用いる適応方略を変える人や、常に同じ方略を用いる人など、いくつかの類型がみられる、という仮説1を立てた。OAS-RSの下位尺度得点をもとにクラスタ分析を行った結果、「親友」と「友だち」のどの関係で過剰適応状態にあるかに関して、6つの適応状態が類型化された。それぞれの群を見ると、友人関係に関わらずパターンが同様である群と、友人関係によって自己抑制の仕方に違いがみられる群が示された。しかし、クラスタ分析の結果を見ると(Figure1)、他者志向性については友人関係によって差が見られず、適応方略として考えた過剰適応の傾向のうち、自己抑制のみが影響するという結果となったため、仮説1は部分的に支持されるにとどまった。また、それぞれの群内の親友からの被受容感と友人からの被受容感の差についても、差が見られる群と差が見られなかった群があることが明らかとなった。以下、クラスタごとに所属する大学生の状態像を考察する。

まずクラスタ1「過剰適応群」は、すべての下位尺度得点が高い群、つまり友人関係全般に過剰適応状態にある群である。群内では友だちよりも親友から被受容感を感じやすいことが示された。また他の群との比較では、クラスタ3, 4, 6よりも被受容感を感じにくいという結果が得られた。これら3つのクラスタは自己抑制得点が低い群である。このことから、過剰適応の状態にあると被受容感を感じにくくなる可能性が示唆された。この群は、自分よりも相手を常に気遣い、相手に合わせることで友人と良好な関係を築こうと努力していると考えられる。友人から受け入れられることよりも、今現在築いている友人との関係性を維持することを優先し、他者を優先する関わりをすることによって孤立を避けている傾向があるのかもしれない。また、「過剰適応群」の人数は76名(男性20名、女性56名)であったことから、調査対象の大学生の約5分の1が過剰適応の傾向にあることが示唆された。このことから、過剰適応状態になっている大学生が一定数いることがわかる。しかし、それぞれの学生が友人関係において過剰適応状態であることによって困り感を抱えているかどうかについては本研究で明らかにすることが出来なかったため、大学生の過剰適応像については、今後検討する必要がある。

続いて、クラスタ2「対親友自己抑制群」は、親友に対してのみ自己抑制得点が高く、それ以外の得点が中程度の群である。つまり、過剰適応的な関係性の築き方をするわけではないが、親友との関係性を築くにあたり、若干遠慮をして自分を出せない部分があると考えられる。また、群内では友だちよりも親友から被受容感を感じやすいことが示された。他の群との比較では、被受容感得点が全クラスタの中で最も低かった。このことから、全クラスタの中で最も友人から受け入れられていないと感じていると考えられる。この群は、友人に対しては現代的友人関係(岡田, 2007)のような、親密性の浅い関係性を築いていると考えられる。特に親友に対しては、やや遠

慮をしながらもほどよい関係性を築いていると考えられる。一般的に親友とは何でも話せる関係性が築かれているイメージがあるが、この群に所属している人は親友に対して自分のすべてをさらけ出すことはしていないと考えられる。このことから、親友と友だちの間の心理的距離が近い可能性が示唆される。つまり、この群の大学生は友人関係を築くにあたり、友人に対して必要以上に本音を言い合うことをせず、当たり障りのない友人関係の維持を大切にしているのかもしれない。また、「対親友自己抑制群」の人数は102名(男性28名、女性74名)であり、6クラスタの中で最も多く、全体の約4分の1が所属している群であったことから、クラスタ1「過剰適応群」と同様に、一定数存在していることが明らかとなった。また、被受容感得点がクラスタ間で最も低かったことから、自己抑制傾向があると被受容感を感じにくくなる可能性が示唆された。

続いて、クラスタ3「対親友非自己抑制群」は、親友に対してのみ自己抑制得点がやや低く、それ以外の得点はやや高い群である。つまり、親友に対しては言いたいことを言うことができる一面もありつつ、気遣う関わり方をしており、友だちに対してはやや過剰適応的な関係の築き方をすると考えられる。よって、親友と友だちで関わり方を変えている群であるといえる。また、群内では友だちよりも親友から被受容感を感じやすいことが示された。そして他の群との比較では、過剰適応の傾向がある群よりも被受容感が高く、どちらの対象に対しての被受容感も全体の平均値(Table7)より高い得点だったため、友人から受け入れられているとある程度感じていると考えられる。この群は、友人関係を築くにあたり相手への気遣いをとても大切にしている。親友に対しては自分の意思を伝えることができ、自他ともに大切にする良好な関係を築いていると考えられる。そして友だちに対しては、過度に自分の意思を抑え込むことなく適切に伝えていていると考えられる。「対親友非自己抑制群」の人数は75名(男性15名、女性60名)であり、全体の約5分の1が所属している群であった。男女別にみると、男性では10分の1、女性では5分の1であることから、男女で所属割合にやや差があることが考えられる。親友に対して自己抑制をせずに、言いたいことをそのまま伝えることができるが、他者を気遣い、同調しながら関わる傾向は、女性のほうがあるのかもしれない。

続いて、クラスタ4「非自己抑制群」は、親友に対しても友だちに対しても自己抑制得点が低く、他者志向性得点は中程度な群である。つまり、友人に対して自分の意見を素直に話すことができ、さらに適度に他者を気遣いながら関係性を作ると考えられる。また、群内では友だちよりも親友から被受容感を感じやすいことが示された。そして他の群との比較では、クラスタ6に次いで被受容感得点が高く、友人から受け入れられていると感じていることが示された。この群は、友人に対して自分の意見を相手にきちんと伝え、相手からも受け入れられていると考えられる。特に親友とは親密な関係を築いているが、友だちに対しても自己主張をすることができ、全般的に友人関係への満足度が高いのではないかと考えられる。「非自己抑制群」の人数は32名(男性13名、女性19名)であり、全体の8%が所属している比較的小規模な群であった。また、男女別にみると、男性で10%、女性で6%と、男性のほうが所属割合が高い群であった。このことから、友人関係全般に言いたいことをそのまま伝えることができる傾向は、男性のほうがあるのかもしれないと考えられる。

続いて、クラスタ5「非過剰適応低群」は、親友に対しても友だちに対しても自己抑制得点および他者志向性得点が低い群である。つまり、友人との関係性を築くにあたり、過剰適応的な関

わり方をしない傾向がある。そして他者志向性の得点が自己抑制得点よりも若干低いことから、相手に気を遣わないで自分の筋を通す傾向があると考えられる。また、群内では親友と友だちで被受容感の感じ方に差がなく、全体の平均値(Table7)と比較しても、どちらの関係性においても得点が低いことが示された。また、他の群との比較では、クラスタ2に次いで得点が低く、友人から受け入れられていないと感じていると考えられる。この群は、友人に対して自分の思いを主張したいという意思があるが、言葉や態度での主張があまりうまくいっておらず、相手からはあまり受け入れられていないため、良い関係性を築くことに難しさを感じていると考えられる。「非過剰適応低群」の人数は99名(男性37名、女性62名)と、全体の約4分の1が所属しており、全体で2番目に所属人数が多い群であった。また、男女別にみると、男性が約3割、女性が約2割と、男女で所属割合にやや差がみられた。このことから、女性よりも男性のほうが、自分を貫く姿勢を強く持っているものの、友人から受け入れられておらず、結果として居心地の良さをあまり感じられない関係性を築いているのかもしれない。

続いて、クラスタ6「非過剰適応高群」は、クラスタ5と比較して、親友に対しても友だちに対しても自己抑制得点および他者志向性得点がより低い群である。つまり、友人との関係性を築くにあたり、過剰適応的な関わり方をせずに、自己主張をしつつ、相手に過度に気を遣うことなく、自分を貫いて関わることができると考えられる。また、群内では親友と友だちで被受容感の感じ方に差がなく、全体の平均値(Table7)と比較しても、どちらの関係性においても被受容感の得点が高いことが示された。さらに他の群との比較では、被受容感得点が全クラスタの中で最も高かった。このことから、この群の大学生は友人全般から受け入れられていると感じていると考えられる。この群は、友人との関係づくりにおいて自己主張をし、それを周りからも受け入れられていると感じていることから、満足のいく人間関係を築いていると考えられる。小林・大久保(2020)では、被受容感が高まると自己や他者についての良い感情や評価が深まり、ポジティブな自己や他者へのスキーマが強まること示されている。このことから、被受容感の高さによって、自分を大切にしたい友人関係を築けていることが考えられる。しかし、自己抑制、他者志向性の両得点の低さから、他者への気遣いがあまりなく、自己満足的な関係になっている可能性も示唆される。「非過剰適応高群」の人数は16名(男性10名、女性6名)であり、全体の4%が所属している群であった。また、この群に所属する人数は全クラスタの中で最も少ないことから、過剰適応状態の要素をもっていない大学生が少ない傾向があることも示唆された。

益原・谷淵(2019)によると、友人関係の良好性は、他者志向型が、内的抑圧と外的努力がどちらも平均的な過剰適応中型、非過剰適応型よりも高いことが明らかとなっている。このことから、友人関係は他者志向性が高いほど良好になる傾向があるといえる。本研究の6つのクラスタと照らし合わせて考えると、クラスタ3「対親友非自己抑制群」はもっとも友好的な関係性を築いており、クラスタ5「非過剰適応低群」、クラスタ6「非過剰適応高群」は最も友好的ではないと考えられる。しかしながら、クラスタ6は被受容感が全クラスタの中で最も高いため、クラスタ6の大学生は今現在の自身の友人関係に満足していることが推察される。

3-4-2 各群と被受容感の関連

本研究では、友人関係によって適応方略を変える人は、同じ方略を用いる人と比較して、「親友」

と「友だち」の間で被受容感の感じ方の差が大きい、という仮説2を立てた。クラスタ分析の結果から、友人によって適応方略を変えるのはクラスタ3、同じ方略を用いているのはその他のクラスタとなった。多重比較の結果、クラスタ間で親友と友だちの間に被受容感の感じ方の差は見られなかったため、仮説2は支持されなかった。ここから示唆されることは、被受容感の感じ方における親友と友だちの差は適応方略の違いによるものではなく、個人の中にある何らかの基準が関係しているという可能性である。その基準と考えられるものとして、例えば家族、教員等の今回検討していない友人以外の相手との関係性、評価を受けるか受けないか、等が想定される。これらについては今後検討する必要がある。

また、被受容感と過剰適応については、過剰適応の傾向が強い群で被受容感得点が低い傾向がみられたため、友人関係において、過剰適応的な関わり、特に自己抑制的な関わりを選択している人ほど、被受容感を感じにくい可能性も示唆された。

第4章 総合考察

4-1 本研究の意義

本研究の臨床的意義を挙げる。

クラスタ分析の結果、クラスタ2「対親友自己抑制群」が最も多く、クラスタ5「非過剰適応低群」が続いて多かった。まず、クラスタ2「対親友自己抑制群」が最も多かったことから、現代的友人関係をとる大学生が一定数いるということが示唆される。つまり、「親友」と定義される関係性でも、完全に心を許せるような関係性であるとは限らない可能性が考えられる。「内面的友人関係」をとる人と「現代的友人関係」をとる人では、「親友」「友だち」という言葉でも、人によってその心理的距離が異なるため、友人関係での問題に対応する際には、その適応方略のタイプによって、さらに相手によっても対処アプローチの方法が異なると考えられる。支援をする際には1人1人の友人関係のとらえ方、その相手との関係性についても理解しながら関わる必要があると考える。次に、クラスタ5「非過剰適応低群」がクラスタ2に続いて多かったことから、過剰適応的な関わりをしないことにより被受容感を感じにくい状態にあり、周囲に対して不適応的になっている大学生が一定数いるということが示唆される。クラスタ5よりも過剰適応の傾向が弱いクラスタ6「非過剰適応高群」と比較すると、被受容感の得点がクラスタ5は低く、クラスタ6は高かった。田中・宮前(2010)によると、空気を読む・読まない自分を肯定的に捉えられるかどうかは、空気を読むスキルがあるかどうかよりもそういう自分を認めてくれる他者の存在があるかどうかが重要とされている。このことから、クラスタ5と6の違いは、周囲に自分のありのままを認めてくれる相手がいると感じているかどうかにあると考えられる。よって、支援の際には、対象者の周囲のサポート資源を確認すること、周囲に対してどのようなイメージを持っているかを把握していくことを行う必要があると考えられる。

4-2 今後の課題

最後に、今後の課題を述べる。

第1に、主観的な友人関係を対象としたことについてである。よって基準があいまいであり、大学生の友人関係の位置づけについて明らかにすることができなかった。そのため、友人関係について、主観のみならず、心理的距離や親密性の程度などの基準を設けて、客観的な視点から、どのような関係性なのかを明らかにする必要がある。

第2に、親友と友だちの位置づけについてである。本研究では親友と友だちのそれぞれ1人ずつの回答を求めたが、1人の友人に自分のすべてを共有するのではなく、それぞれの対象に合った会話をしたり行動をしたりする関係性が成り立っている可能性も考えられる。場面や対象に応じて被受容感が異なるのかについて、今後検討していく必要がある。

第3に、被受容感の概念についてである。被受容感は自分のありのままを受け入れてもらえる、という概念である。しかし、受容してもらえている、と感じることができない人と一緒に過ごすことはストレスフルな状況であると推察される。そのため、友人関係を築くうえで、ありのままの自分を受け入れられるということではなく、自分が望んでいる姿、つまり他者にみられたい自分を受け入れられることも必要であり、特に過剰適応の傾向にある人はそれが認められることにより、健康的、適応的に生活できると考えられる。本研究ではそのような受容感について考えることができなかった。今後、被受容感以外の受容感についても検討する必要がある。

第4に、対象を4年制大学生のみにしたことについてである。同じ青年期でも学校形態が異なる学生や、就職している青年にも共通していることなのか、あるいは大学生特有にいえる傾向であるのかについては今後検討する必要がある。また、この友人関係の傾向が成人期になっても継続するのかについても今後明らかにすることで、青年期から成人期にかけての友人関係の変化を理解し、友人関係における問題の支援に役立てることが出来ると考える。

引用文献

- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the lifecycle*. New York: W. W. Norton & Company Reissue, 1 小此木圭吾訳・編, 1973, 自我同一性, 誠信書房.
- 畑野快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都筑学 (2020). 青年期・成人期初期におけるアイデンティティの発達傾向と人生満足感の関連：大規模横断調査に基づく検討 発達心理学研究, 31(1), 26-36.
- 石本雄真・久川真帆・斎藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20(2), 125-133.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2007). 中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55(2), 271-288.
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 春日秀朗・宇都宮博・サトウタツヤ (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, 25(2), 121-132.
- 風間惇希 (2015). 大学生における過剰適応と抑うつの関連—自他の認識を背景要因とした新たな過剰適応の構造を仮定して— 青年心理学研究, 27, 23-28.
- 風間惇希・平石賢二 (2018). 青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討—関係特定性過剰適応尺度 (OAS-RS) の開発を通して— 青年心理学研究, 30, 1-23.
- 小林光荣・大久保純一郎 (2020). 被拒絶感及び被受容感が中核信念やストレス反応におよぼす影響 帝塚山大学心理科学論集, 3, 21-28.

- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察：欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- 益子洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承認欲求との関連 カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 益子洋人 (2010). 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感に及ぼす影響 学校メンタルヘルス, 13(1), 19-26.
- 益原瑞隆・谷渕真也 (2019). 大学生における過剰適応傾向と友人関係良好性および身体的・精神的健康との関連 心理相談センター紀要, 比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター, 15, 37-45.
- 難波久美子 (2005). 青年にとって仲間とは何か：対人関係における位置づけと友だち・親友の比較から発達心理学研究, 16(3), 276-285.
- 永井暁行 (2018). ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類—友人関係による居場所感の違い— 教育心理学研究, 66, 54-66.
- 岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 2, 135-148
- 近江則子・田名場美雪・田名場忍 (2004). 大学生の被受容感・被拒絶感に関する探索的検討 弘前大学保健管理概要, 25, 12-19.
- 関真伍・堀井俊章 (2019). 児童期における友人からの受容と自尊感情の関係 横浜国立大学教育学部紀要, 2, 136-151.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54(3), 289-299.
- 杉山崇・坂本真士 (2006). 抑うつと対人関係要因の研究：被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討 健康心理学研究, 19(2), 1-10.
- 高橋舞・高橋靖子 (2022). 青年期における親から友人への愛着対象の移行と心理的自立の関連 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 12, 1-10.
- 田中圭・宮前淳子 (2010). 他者志向性への自己肯定感とソーシャルサポートとの関連 香川大学教育実践総合研究 = Bulletin of Educational Research and Teacher Development of Kagawa University, 20, 33-43.
- 竹端佑介・後和美朝 (2020). 大学生の愛着スタイルと自己意識および他者意識との関連性 学校保健研究, 61, 331-339.
- 竹村理志・岡田倫代・柴英里 (2021). セルフコントロールの高さと過剰適応・セルフコンパッションの高さと非過剰適応 高知大学学校教育研究, 3, 279-284.
- (辞書類)
- 「仲間」. 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大 (編)『三省堂国語辞典』第八版. 株式会社三省堂, 2022, p.1101.